

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第482号 2022年5月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

ひたすらとりくむ

山本 隆三

教師になって初めて担任した女児が六十年もたって、突然に三浦綾子の『道ありき(青春編)』を送ってきた。

「主人の本棚から取り出して読んでいると当時の先生の姿を思い出し、失礼かと思いつながら、この本を先生に差し上げたいと思って、主人の了解も得て送らせて頂きました」という手紙が添えられていた。

『道ありき』の冒頭は「七年間の教員生活は、私の過去の中で、最も純粋な、そして最も熱心な生活であった。私は異性よりも、生徒の方がより魅力的であった。」

授業が終わって、生徒たちを玄関まで見送る。すると生徒たちは、「先生さようなら」先生さようなら」と、私の前にピヨピヨと頭を下げて、一目散に散って行く。

く。ランドセルをカタカタさせながら、走って帰っていく生徒たちの後姿を眺めながら私は幾度涙ぐんだことだろう。」

で始まっている。教育というものが何もわかっていない中で取り組んでいた私の姿が、鮮明にこの教え子の脳裏にあったことに感動を覚えた。教え子は教わった内容より取り組んでいた私の姿を脳裏に残していた。教え方はめちやくちやだったと思うが取り組んでいた心を受け取ってくれていた。これが教育だったんだと思った。

今も教師は指導力の向上を目指して必死に教え方を求めている。教え方、まさに「方」である。しかし、万人に成立する「方法」って存在するであろうか。あちらの教案を探り、こちらの教案を探り

求めあがいている。その姿は尊

がこれでもいいのだからかとも思う。人の頭を借りて指導するとまではないが、目の前の学習者である子供の実態を横に置いて指導が成立するのか疑問である。教師が育つ、それは指導法を数多く知ることではない。目の前の学習者での子供の姿を見て、伸ばす糸口を見つけて(教師自身が豊かになり)、どこからでも方法を見つけていく力をつけることである。自分自身の頭と心で求め続け、自分の学級の指導を見つけないとできないことである。教師としての成長、それは自分の頭で生み出せる力をつけることであろう。まず子供の心を開き「心を通わせる」ことが根底である。

ひたすらとりくむ。この中から自分の教育が生まれ、「教師としての自立と成熟」が得られる。「教育を生む」、今こそ心すべき教師の姿勢であろう。「情熱と純粋」、忘れかけていたことを再認識させられた。ガウディの芸術の原点は愛情であるという。教師の指導の原点も愛情である。いや責任と言ってもいい。人の頭に頼る前に自分の考えを持つとう。

丁寧すぎる(甘やかさすぎる)指導も考えものである。もっと突き放して、子供が楽しんで(苦しんで)、悩んだり、失敗したり、困ったりして自分の力をつけてやる(鍛えてやる)ことに力を注ぐべき時である。学ぶ・教えるという関係の中での「無意識の感化」こそ教育がある。教育は教師という「人」を見せて未来を作っている。

(国語研究集団「東風の会」代表 元西宮市立東山台小学校校長)



▼「あなたのは」とばかり訊く妻さくらんぼ(小山正美句集『大花野』)を読んだ時、奥様の細やかな気遣いに感動した。詳しく読んでいくと外に出れば道に迷う。家の中でも迷子になるという認知症と思われる奥様であることから「あなたのは」の意味の深さを感じた作品▼「あなたのは」に似た言葉を耳にするのが一年生の教室。給食時など、子供の食べ方を見守っていると「先生は食べないの」心配して声をかけてくれる。授業中、元気がないと知ると「大丈夫ですか」氣遣ってくれる。先生への氣遣いを至る所にみせてくれる▼一年から六年へと「氣遣い」の視点を授業に広げてみた。ある教室で、「楽しかった授業・楽しいと思う授業」を書かせたところ、「私たちが司会者になって進めていった時間です。いつもは、聞くだけだったのが、このやり方になって、友達司会の仕方を見たり、自分の番になると、聞いてほしい、分かってほしいという気持ちが強くなりました」という文が印象に残ったという話を聞いたことがありません▼子どもの心に近づくのはむずかしい。けれど、どんな授業がしてほしいかと聞くこと、授業で多くの時間をかけている板書をどのように考えているか等という「気遣い」であるとうと「あなたのは」の俳句から感じた。

(吉永幸司)

作文指導

川部 長人

昨年度、三年生の担任をしており、行事の後などには作文を書くようにしていた。子どもたちに作文紙を配ると、「ええー、めんどくさ」という声が返ってくる。が多かった。当声を振り返ると、「作文指導」と言えることはほとんどできていなかったことが大きな原因である。

どうにかしたいと思っていたある日、給食の時間に音楽集会の作文発表があった。各学年の発表を聞いていると、とても印象に残るクラスがあった。子どもたちの思いがとても上手く表現されており、聞いている自分がとても楽しい気分になった。早速その先生に作文指導のことを聞きに行くと、校内でミニOJTを開こうということになった。作文指導には段階があるということを知り、まずは「作文の書き出し」と「五感で感じたこと」をもとに作文を書いてみることにした。その時子どもが書いた作文を紹介する。

『三年生で一番がんばった日』
K・Y

とうとう来てしまった、この日。心ぞうの音がどくどくと鳴りひびいている。友達もいっしょだった。本気を出す日、本番だ。

自分がドキドキしているとき、他の友だちが、「みんな気持ち

一緒だと思っよ」と、私に言うてくれた。

(えっ、みんなも一しよだったんだ。少し安心したな)と思ひ、友だちに「ありがとう。安心したよ」と言った。

「うん。みんなで力を合わせようね。」と、二人のしゃべり声が教室にひびいた。

トコトコ。しずかにろう下を歩いて、三年月組は、体育館へ向かう。体育館につくと星組は、先に来ていた。

雪組も来て、三年生がそろった。ビデオさつえいが始まる。

げきでは大きな動きをした。笑顔も、動きも、自分では百パーセントできたと思う。

放送を見ると、みんなでガヤガヤ、ワイワイ、楽しかった。

本当に、みんなで、心を合わせていげきができた。

一度の指導だけで、子どもたちの書く文章が大きく変わったことに驚いた。この日をきっかけに、子どもたちは作文を楽しんで書くようになり、私も子どもたちの作文を読むのがとても楽しみになった。後日、作文指導について学んだ先生から岩下修さんの『書けない子をゼロにする作文指導の型と技』という本を紹介していただき、現在はその本をもとに作文指導について学んでいるところである。今年度の五年生の子どもたちとも、作文の学習を楽しんでいきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

低学年の指導によせて

川端 由起

2年生を初めて担任することになりました。まず、戸惑ったのが黒板に児童のノートに合わせた文字を書かないといけないことです。

5月中旬も過ぎてまだ慣れないのですが、最近では児童側が自分でも黒板の文字をノートに上手に写すことができるようになってきました。慣れはすこいです。次に、「認識」や「自覚」「理解」などという言葉をここ最近中学年、高学年を担任していたので使っていました。2年生には、全く通用しません。日々辞書を持ち、言葉の言いかえを練習する日々です。

「きょうのできごと」で初めて日記を書く学習を5月連休明けにしました。ゴールデンウィーク明けということもあり、体験したことがたくさんあるので、日記はほぼ全員がすらすら書き進めることができました。経験したことなら、やはり人は筆が進むと実感した瞬間

間でした。ところが、「ともだちをさがそう」の【絵の中のほかの子どもをえらんで、まいこのおしらせをしてみましよう】になると、5人ぐらいの子どもがノートが空白のままです。それまでに2回ほど話を聞くとときにだいなことを一緒に考えてきたのですが、それでも何を書くかわからない様子です。

私は、学び合いという観点で、今まで最低限のヒントを与えることを重点的に行ってきたのですが、最近では「考えて」と言っても、何を考えるのかわからない児童も一定数いることがわかってきました。それは幼少期の読み聞かせ体験の少なさ、経験の少なさ、日々の家庭学習の有無が起因していると思われます。そのような児童に、「考えて」という言葉は、今までも考えてこなかったのに、無理なのではないかと認識し始めました。

視覚支援という形で、担任が書いた見本を見せたり、わかりやすく絵にかいたものを見せる形で支援していこうと思います。

(草津市立志津小学校)

「しまった。
教材研究不足だ。」
川端 大介

一年生国語科では初めて物語文『はなの みち』を学習した。子どもたちがくまさんの台詞を工夫して読むことができた実践を紹介する。

単元計画は五時間で組むことにした。第一時は教師の範読と音読の工夫を考えた。第二時で話の内容をまとめた。第三時で登場人物と季節の変化の検討をした。第四時で台詞を選んで学習班で読み合う活動を行った。

第一時で「はなの みち」の学習を始めるとき、Aさんがこう言った。

「ぼく、家で読んできたんだけど先生分らないことがありません。」とのことだった。何が分からないのか尋ねたところ、私は痛烈な気付きを子どもからいただいた。

「なぜ、くまさんがしゅじんこうなんだらう。」とのことだった。私の教材分析・教材研究では全く無い視点だったので、一緒に悩んだ。答えはあるのかもしれないが、心の中で教材研究の未熟さに「しまった。」という思いを持った。

未熟さを感じた直後、「しまった。」という否定的な思いが前向きな「しまった。」に変わった。物語の中に出てくるくまさんの台詞が二つある。後に出てくる台詞に「しまった。あながあいてい

た。」というものだ。はなのみちの教材研究をする上で五十回程度、音読をした。二つの台詞をどう読んだらいいのかを考えながら読んだ。

「おや、なにかな。いっばいはいつている。」であれば、何が入っているのかと不思議な感じで読むのが大半であろう。

「しまった。あながあいていた。」であれば、種を落としてしまったと、困った感じで読むだろう。

繰り返し、前述した二つの台詞を中心に音読をした。その中で、何となく分からないことがあった。それは『不思議な感じ』『困った感じ』とは何かということだ。

きつと、学級の大半の子はその二つの感じを理解し、音読で表現できるかもしれない。が、それは『なんとなく』の表現であるように感じる。

「なぜ、くまさんがしゅじんこうなんだらう。」という問いに答えられなかった私は、何か本物の『困った感じ』を体得できた気がした。

こんな、心にグサツと残るような発問を授業で仕掛けていくことができるようにしたいと痛感した時だった。

子どもたちにとって身近な『感じ』は多様である。それらを具体的に引き出せるような体験を学習内容に合わせて経験させてあげる視点を持つことの大切さを教えてもらった。約一ヶ月だった。

体験を通して得た学びを私は一生忘れたいだらう。
(守山市立 立入が丘小学校)

詩人になる
好光 幹雄

T ○ん○ん ○ん○ん のうた

(板書)

この○の中に、ひらがなが一つを入るよ。みんな同じひらがなです。例えば、「か」を入れると。「かんかん」て、なりますね。「かんかん」って、どんなときですか？

T C 鐘がなるとき。怒るとき。…

では、かんかん かんかん かねがなる(板書)

こんな感じで、みんなで作ってみるよ。

T C うんうん うんうん

そうです。そんな感じです。いいね。どんなときですか。

T C うんこするとき。

なるほど。言うと思ってました。大切なことですね。うんこ出なかつたら大変ですね。

うんうん うんうん がんばるよ(板書)

T お母さんが台所で頑張っているとき、どんな音がしますか？

C あっ、料理するときです。まな板とかで、とんとん。

T なるほど、そうですね。まな板で包丁をとんとんしますね。

とんとん とんとん りょうりする(板書)

こんな感じで、一年生の子もまたちとうたを作りました。

○ん○ん ○ん○ん のうた

かんかん かんかん かねがなる
うんうん うんうん がんばるよ
とんとん とんとん りょうりする
らんらん んらんらん さんぽみち

きんきん きんきん かきこおり
あんあん あんあん あんこもち

T では、今日勉強するひらがなはどれか、もう分かれますね。

C 「ん」
T えっ、聞こえないよ。

C 「ん」!
T 大きな声で!

C 「ん」!!
T はい、「ん」ですね!(笑)

一年生の入門期は小学校教育の基礎の基礎。中でも文字の読み書きの学習は極めて重要。きちんとしっかり身につけさせたいものですが、子どもの学びの意欲が無ければそれは不可能です。ひらがなも機械的に正しい筆順を教えれば良いと言ってもありません。文字の一つひとつにも興味関心を持たせ、搜してみたい・書いてみたい・使ってみたいと思えるような工夫を少しでも取り入れたいものなのです。因みに「あいうえお」も教科書には少ししか掲載されています。そこで全ての五十音の「あいうえお」を自作しました。勿論、拗音や濁音や片仮名も。

一年生の教室は、子どもと私を詩人にしてくれる楽しい教室です。久しぶりに公立の小学校の教壇に立ち、私は夢を追い続けていきます。

(瀬田小学校講師)

「話し合い」が
 成立する学級づくり
 川那部 隆徳

今年度、本校学校経営全体計画の具体的重点目標に、「話し合い」が成立する学級づくり」を挙げた。その意図は、次の二点である。

○「話し合い」を通して、学習集団を育成する。
 ○「話し合い」を通して、学級集団を育成する。

前者は、「話し合い」が成立する学習集団を育成する過程で、授業改善を図り、学力向上につながることをねらっている。

「話し合い」が成立するには、まず、テーマに対する考えを個々の児童がもち、そして、それらと交流する場で、相手の発言を受けて自分の考えを発言し、個々の発言を練り合って考えをまとめていかなければならない。このような授業を通して、考える力、話す力、聞く力等を育成していくことになる。また、このような授業の積み重ねにより、学習規律を定着させたり、学び方を習得させたりしながら学習集団が育成されていく。後者は、「話し合い」が成立する学級集団を育成する過程で、互いに認め合い、支え合う集団づくりにつながることをねらっている。

間違った発言をしても笑われな
 い。自分の発言をみんなが受け止

めてくれる。そんな自分の考えを安心して話せる集団。一部の児童の発言で完結するのではなく、個々の考えが活かされる集団。このような集団を基盤に「話し合い」は展開していく。換言すれば、「話し合い」が成立する学級づくりは、そんな安心感や喜びのある集団を育成していくことになる。

「話し合い」が成立する授業づくり

一見、活発に発言しているようでも、発表の羅列で完結しているのは、「話し合い」とは言えない。発表のし合いは二状態である。しかし、あえてこれを否定せず、「話し合い」が成立する一過程ととらえ、そこから「話し合い」へとコーディネートしていききたい。

○個々の発表が生まれる状況をつくり出すために

・ クラス全体に聞こえる声量
 声が、クラス全体に届いていることは、話し合いの大前提である。ところが、「大きな声で話してごらん」では、発表の声は大きくなる。大きな声を出す経験をさせることが重要である。ゲーム的な要素を取り入れて大きな声を出す必然のある場や、知らず知らずのうちに大きな声を出していたという場を工夫することが有効である。

・ 考えのため込み
 発言できるだけの考えのため込みを、各自に保障する必要がある。話せる内容があれば、気持ち面の

支援により発言が生まれる。

・ 話し方のスキルの獲得

「まず、次に、それから」、頭括等々、どのように話すかよいかのスキルを身に付ける場を工夫する。

・ 聞く力、態度の育成

態度面にとどまらず、ポイントをおさえて聞く、順序を表す言葉に着目して聞く等々、聞く力そのものを鍛える場を工夫する。

○「話し合い」へつなげるために
 ・ 授業者の出番

様々な考えが出そろったあとが、話し合いの場となる。授業者は、発言を対比して共通点や相違点を見つけ出したり、意見を整理したりする機会を逃さない。

・ 話し合いのテーマを吟味

様々な視点から多様な意見が出るテーマを設定することが重要である。国語科の授業だけでなく、様々な教科や領域等において話し合いの場を工夫したい。

・ 話し合いの様々な形態の経験

事前に用意した原稿を順に話すだけでは、話し合いではない。ペア、小グループでの話し合いを活性化させたい。同時に、司会者を育てることが肝要となる。

「話し合い」が成立する学級をつくることは、一朝一夕にできることではない。しかし、それを目指すしていく過程を大切に、学校全体として取り組んでいきたい。

(栗東市立治田東小学校)

編集後記

▼四月例会
 は、3月に引

き続きメールで提案と感想・意見の交流を行いました。提案は「令和4年度の実践と研究」について吉永が行った。▼令和4年度研究主題は「人間力を育てる国語科授業づくり」とした。「人間力」は改めて定義をすることでなく、どんな子に育てたいか、どんな授業をしたかを自問自答する時に、無意識に考えていることです。「人間力」が育っているであろう子どもや授業の姿を求めているからです。言葉の力は人間力に直接結びついています▼授業は意図が背景に行われるものです。しかし、子どもを大事にするということは、「ひとりひとり」の子どもの「言葉」の育ちを丁寧に見守ることが求められます。それが、授業の技術・評価・支援であり、助言という形で表れます。計画通り進んだというより、「子どもが育っている姿」を、学習をする子どもに学び合うことを大事にしたいと考えています▼研究成果の見通しでは、「国語がすき」「国語が大事」と思う子が増えることと、授業を通して、言葉の使い手としての子供目を向けることが多くなること。それが、「人間力」・「言葉」・「国語の授業」について、具体的にイメージ語れること、実践のイメージが生まれるという国語科指導力の向上という資質を磨くことを目的にしています。

▼巻頭には、山本隆三先生から玉稿を頂きました。深謝。
 (吉永幸司)